

—日本語読解力をつけるためのテキスト—

Advanced Japanese Reading and Writing

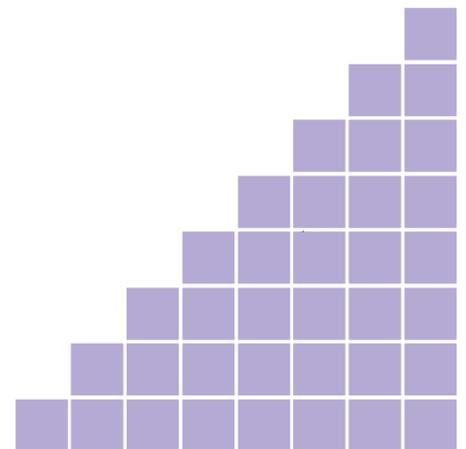
テキスト 1: 芥川龍之介『魔術』

* 読む前に

1. 『魔術』ということばから、どんなことをイメージしますか。
2. あなたは『魔術』を習いたと思いますか。なぜですか。
3. 作者（芥川龍之介）について調べましょう。
4. もしあなたが『魔術』を使えたら、何をしますか。
5. 人にはどんな欲よくがありますか。
6. 欲よくがある事はいいことだと思いますか。悪いことだと思いますか。どうしてそう思いますか。

* 読みましょう(抜粋) 段落 1 :

ひょうばん



「いや、かねがね 評判はうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議なもの
だろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言う
のは、御冗談ではな
いのですか。」

ぞうさ

「使えますとも。誰にでも造作なく使えます。ただ——」と言いかけてミスラ君はじまじめっと私の顔を眺め
ながら、いつになく真面目な口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思った

ら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

あと 私はこう答えまし

たが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後から言葉を添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは

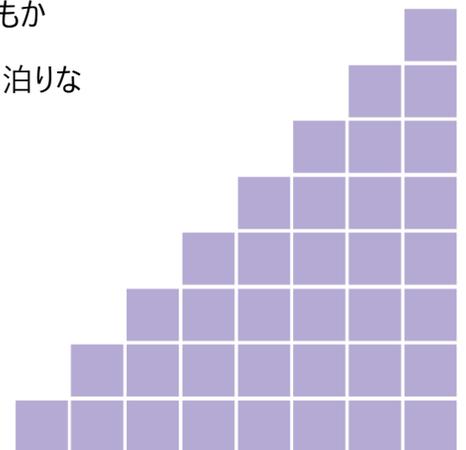
ぶしつけ おおよう うなず

無 駄だとも思ったのでしょう。やがて大様に頷きながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使えると言っても、習うのには暇もか

おとまかりますから、今夜は私の所へ御泊りな

さい。」



「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えて貰う嬉しさに、何度もミスラ君へ御礼を言いました。が、ミスラ君
とんちやく けしきはそんなことに頓着する気色もなく、静に椅子から立上ると、

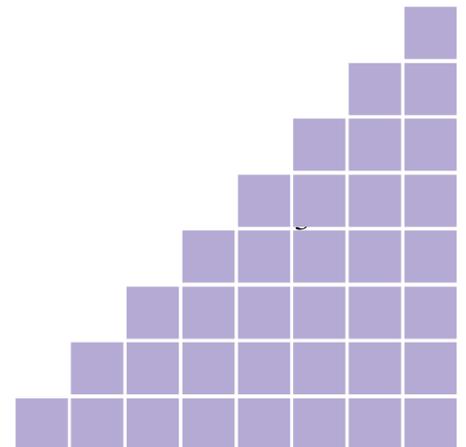
「御婆サン。御婆サン。今夜八御客様が御泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテ
置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプ
の光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。質問 1：ミスラ君は、どんな人が
魔術を使えると言っていますか。それに対して、
『私』は何と答えていますか。

質問 2：あなたなら、ミスラ君に何と答えますか。

質問 3：ミスラ君の最後の会話がカタカナになっています。ここでは、カタカナ

にすることでどんな効果がありますか。



段落 2 :

のち

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたった 後 のことです。これもやは

くらぶりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀

座のある倶楽部の一室で、五六人の友人と、

だんろ

暖 炉の前へ陣取りながら、気軽な雑談に耽っていました。（中略）

ひょうばん

「君は近頃魔術を使うという 評 判 だが、どうだい。今夜は一つ僕たちの前

で使って見せてくれないか。」

「好いとも。」

もた

おうへい

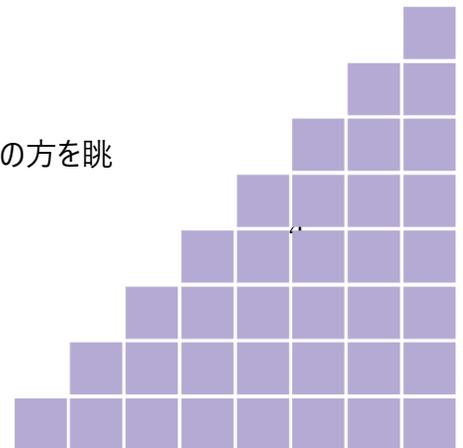
私は椅子の背に頭を 靠 せたまま、さも魔術の名人らしく、横 柄 にこう答えました。

てじなし

「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師などには出来そうもない、不

思議な術を使って見せてくれ給え。」

友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すように私の方を眺



おもむろ

めました。そこで私は 徐 に立ち上って、

しかけ

「よく見ていてくれ給えよ。僕の使う魔術には、種も仕掛もないのだから。」

質問 1 : この段落では、『私』は誰と、どこにいますか。魔術は習ったのでしょうか。それはどこでわかりますか。

質問 2 : 『私』は今どんな気持ちになっていますか。それはどこでわかりますか。

段落 3 :

さか

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛っている石

むぞうさ

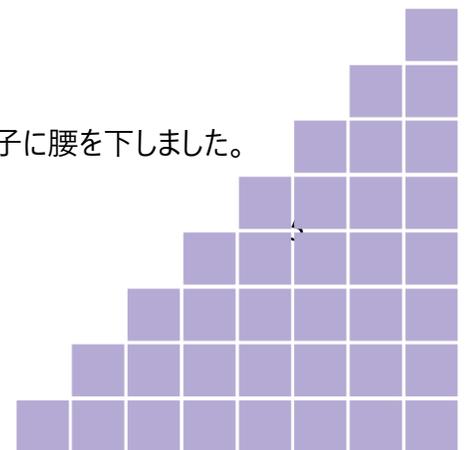
炭を、無造作に掌の上へすくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけで

あらぎもひしも、もう荒胆を挫がれたのでしょう。皆顔を見合せながらうっかり側へ寄って

やけど

火傷でもしては大変だと、気味悪るそうにしりごみさえし始めるのです。〔中略〕

「まずちよいとこんなものさ。」私は得意の微笑を浮かべながら、静にまた元の椅子に腰を下しました。



「こりゃ皆ほんとうの金貨かい。」あつけ たず

呆 気にとられていた友人の一人が、ようやくこう私に 尋 ねたのは、それから五分ばかりたった後のこと
す。

「ほんとうの金貨さ。嘘だと思ったら、手にとって見給え。」（中略）

ま友人たちは、元より私から、あの金貨を残ら

ず捲き上げるつもりで、わざわざ

かるた

骨 牌を始めたのですから、こうなると皆あせりにあせて、ほとんど

けっそう

血 相 さえ変わるかと思うほど、夢中になって勝負を争い出しました。が、い

くら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、

きんだか

あの金貨とほぼ同じほどの 金 高 だけ、私の方が勝ってしまったじゃ

ありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、気違いのような勢いで、私

ふだ

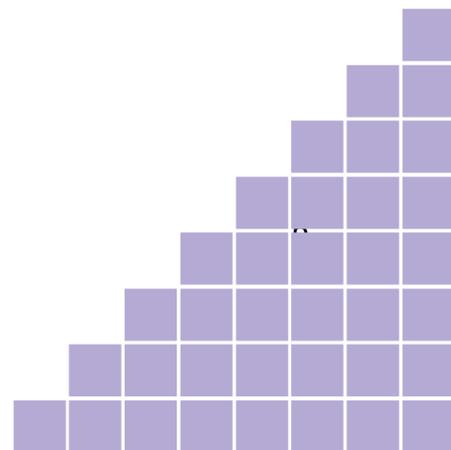
の前に、札 をつきつけながら、

かさく

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家 作も、馬も、

自働車も、一つ残らず賭けてしまう。その代り君はあの金貨のほかに、今まで

君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」



せつな私はこの刹那に欲が出ました。テーブルの上に積んである、山のような
金

貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人

に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、

私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使わなければ

かい

どこに魔術などを教わった、苦心の甲斐があるのでしょうか。そう思うと私

やたて

は矢も楯もたまらなくなって、そっと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、「よろしい。まず君
から引き給え。」

く

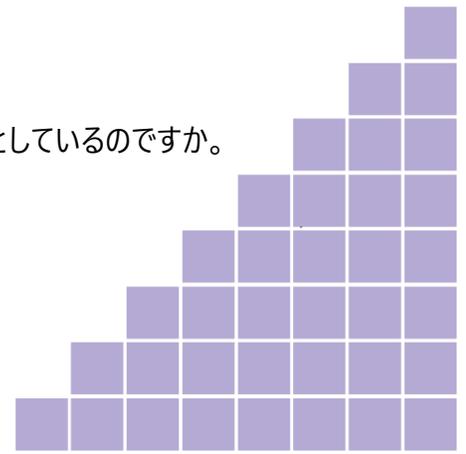
「九。」キング

「王様。」

質問1：皆は『私』の魔術を見て、最初はどんな反応を示しましたか。本物の金貨だと分かったとき

はどんな反応を示しましたか。

質問2：なぜ友人は『気違いのような勢いで』自分の全財産を賭けようとしているのですか。



質問 3 : 『私』が、『この刹那に欲が出た』のはなぜですか。

質問 4 : 『私』は賭けに何を使おうとしていますか。なぜそれを使うのですか。

段落 4 :

私は勝ち誇った声を挙げながら、まっ蒼になった相手の目の前へ、引き当て

ふだ かるた キング

た札を出して見せました。すると不思議にもその骨牌の王様が、まるで

魂がはいったように、 かんむり もた ふだ
冠をかぶった頭を擡げて、ひょいと札の外へ

体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、
「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰りニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナ

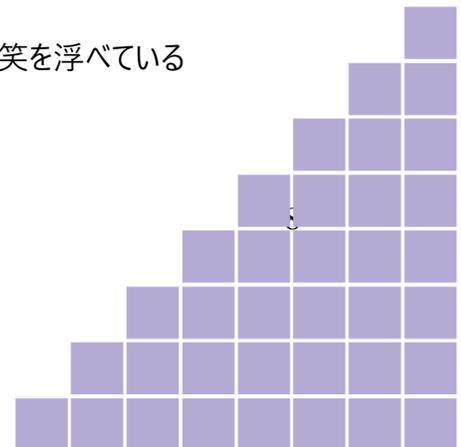
クテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降あまあし ぶる雨脚までが
、急にまたあの大森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざ降

りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びな

かるた キングがら、まるであの骨牌の王様のような微笑を浮べている
ミスラ君と、向い



合って坐っていたのです。

はさ

私が指の間に挟んだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所を見ても、

私が一月ばかりたったと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのにの秘法を習う資格のない

人間だということは、私自身にもミスラ君にも、明かになってしまったのです。私は恥しそうに頭を下げた

まま、しばらくは口もき

けませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたは

それだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテエ

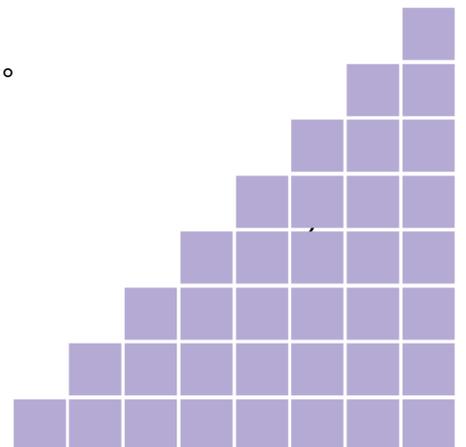
ひじブル掛の上に肘をついて、静にこう私をたしなめま

した。

質問 1 : 『私』が勝ったとたん、どんなことが起こりましたか。

質問 2 : 『私』は、今どこに、誰といますか。

質問 3 : 『私』が結局どうなったか、テキストに沿って簡単に説明しなさい。



* 読んだ後で

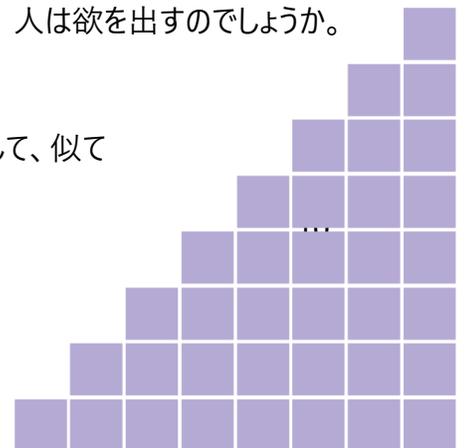
1. 『私』は魔術を習う資格があるとミスラ君は考えていましたか。ミスラ君はどんな人物だと思いますか。どうしてそう思いますか。
2. 『私』は始めに自分をどんな人間だと思っていましたか。結局何が明らかになりましたか。どうしてですか。

『私』は、修行したら、いつか魔術が習えるようになると思いますか。どうしてそう思いますか。

3. このお話の中で述べられている夢と現実では、時間の早さがどのように違いますか。
4. このお話のメッセージは、何ですか。
5. このお話で、場面の雰囲気を感じる箇所をそれぞれの段落の中から見つけましょう。

* ディスカッショントピック

1. あなたは欲のない人はいると思いますか。なぜ（またはどんな時に）人は欲を出すのでしょうか。
2. 同じ作者の作品に『蜘蛛の糸』がありますが、このストーリーと比較して、似て



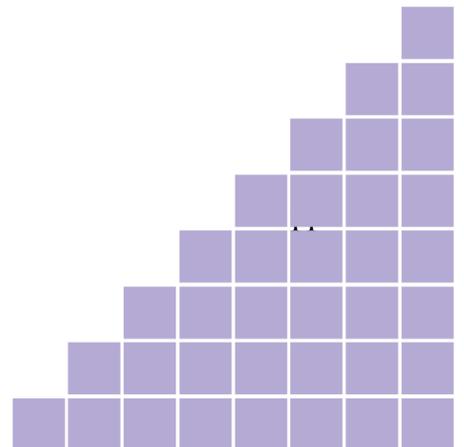
いる点、違う点をリストしてみましょう。

3. 作者は、人間の本性をどのようにとらえていますか。性善説ですか。性悪説ですか。あなたは、どちらの立場を取りますか。それはなぜですか。
4. 世界三大宗教（キリスト教、仏教、イスラム教）のそれぞれの人間の『欲』に対する考え方を調べてまとめましょう。

テキスト 2: 芥川龍之介『ら羅生門もん』

読む前に

1. 著者ちよしやの芥川龍之介の生い立ちをもう一度確認かくにんしましょう。



- 『羅生門』というのはなんのことですか。調べましょう。また、この話は平安時代を題材にしていますが、平安時代とはどんな時代だったのか調べましょう。
- 映画『羅生門』(1952年、監督黒沢明)を見たことがありますか。どんな内容だったか覚えていますか。また、どんな感想を持ちましたか。

* 読みましょう(抜粋)

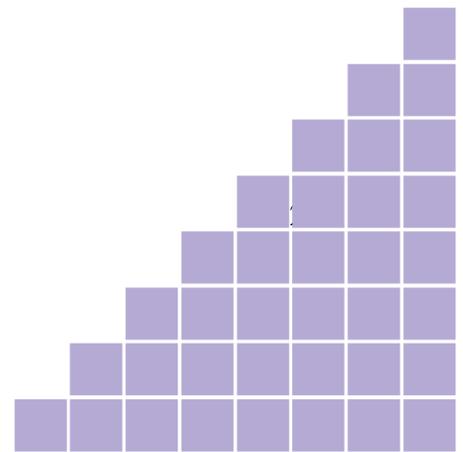
段落 1 :

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々、にかわの剥げた、大きな円柱に、きりぎりずが一匹とまっている。羅生門が、すざく大路にある以上は、

この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二、三人はありそうな

ものである。それが、この男のほかに誰もいない。



段落 2:

何故かと云うと、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云

う 災 がつづいて起った。そこで 洛中 のさびれ方は一通りではない。旧記

によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした

木を、路ばたにつみ重ねて、新の料に売っていたと云う事である。洛中がその

始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。す

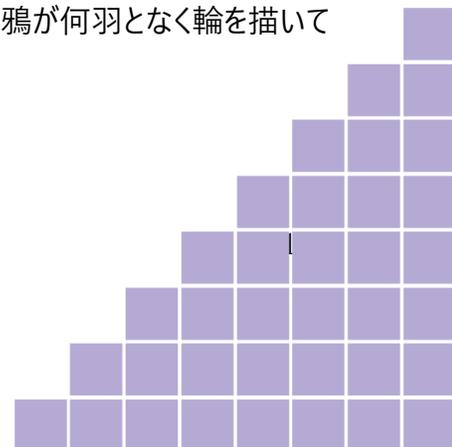
るとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしま

いには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ

出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足ぶみをしな

い事になってしまったのである。

その代り、また鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。こと



に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻^{ゴマ}をまいたようにはっきり

見えた。鴉は、勿論^{もちろん}、門の上にある死人の肉を、啄^{つば}みに来るのである。——もっ

とも今日は、刻限^{こくげん}が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々^{ところどころ}、崩れ^{くず}かかった、

そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞^{ふん}が、点々と白くこびり

ついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の

襖^{あお}の尻^すを据えて、右の頬^{ほお}に出来た、大きな面皰^{にきび}を気にしながら、ぼんやり、雨の

ふるのを眺^{なが}めていた。

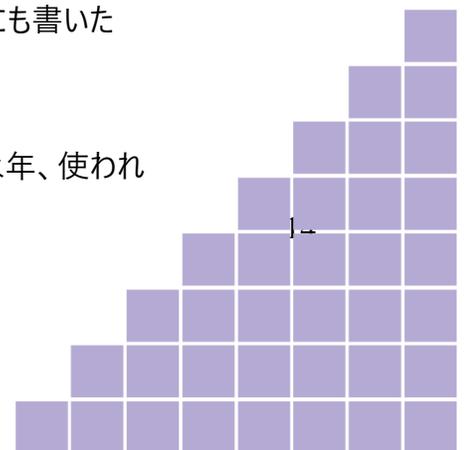
段落 3:

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がや

んでも、格別^{かくべつ}どうしようと云う当てはない。ふだんなら、勿論^{もちろん}、主人の家へ帰るべ

き苦^{はづ}である。ところがその主人からは、四、五日前に暇^{ひま}を出された。前にも書いた

ように、当時京都の町は一通りならず衰微^{すいび}していた。今この下人が、永年、使われ



ていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波^{よは}にほかならない。だから「下人が雨
やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方^{とほう}にくれていた」と云
う方が、適当である。その上、今日の

空模様も少^{すくな}からず、この平安朝^{ちやう}の下人の Sentimentalisme に影響^{えいきやう}した。申^{さる}の

刻下^{こくさが}りからふり出した雨は、いまだに上^{あが}るけしきがない。そこで、下人は、何を

おいても差当^{さしあた}り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない

事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから

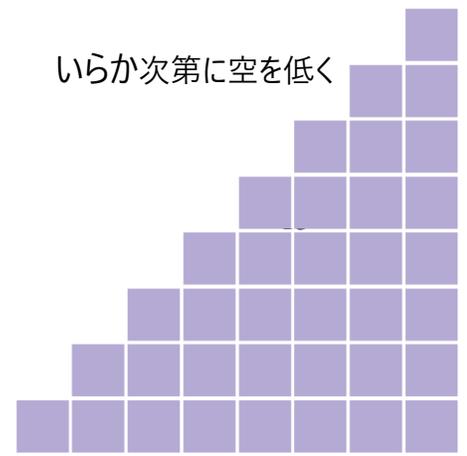
朱雀大路^{すざくおおじ}にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

段落 4:

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕間は

して、見上げると、門の屋根が、斜につき出した 蔓の先に、

いらか次第に空を低く



重たくうす暗い雲を支えている。

いとま どうにもな

らない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる 違 はな

ついじ

うえじに

い。選んでいれば、築 土の下か、道ばたの土の上で、饑 死 をするばかりで

ある。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりで

ていかい あげくある。選ば

ないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を 低 徊 した揚 句ほうちやくに、やっとこの局所へ
逢着 した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっ

ても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながら

ぬすびとも、こ

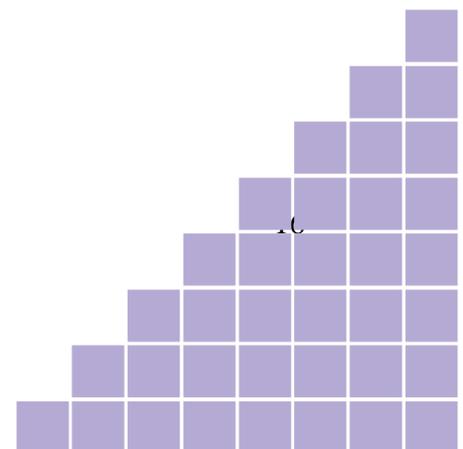
の「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗 人

になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

くさめ

たいぎ

下人は、大きな 嚏 をして、それから、大 儀 そうに立上った。夕冷えのす



ひおける京都は、もう火 桶 が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との
間を、夕

にぬり きりぎりす
闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹 塗の柱にとまっていた 蟋 蟀 も、もう

どこかへ行ってしまった。

くび やまぶき かざみ あお
下人は、頸 をちぢめながら、山 吹 の汗 衫 に重ねた、紺の 襖 の肩を

うれえ おそれ
高くして門のまわりを見まわした。雨風の 患 のない、人目にかかる 惧 の

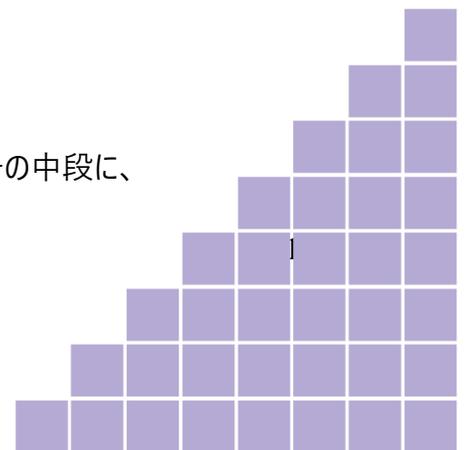
ない、一晩楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思っ

たからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った

はしご梯 子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下ひじりづか
たち さやばし人はそこで、腰にさげた 聖 柄 の太刀が 鞘 走 らないように気をつけな

わらぞうりから、藁 草 履 をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけ
た。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、



ようす一人の男が、猫の

ように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺ってい

た。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚

うみ にきび

の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上に

くくいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、
梯子を二三段上って見る

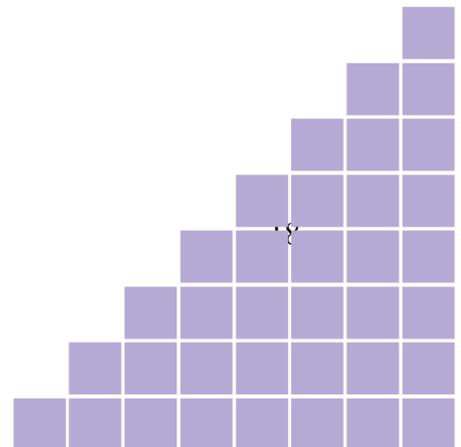
と、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。こ

くもれは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れなが

ら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているから

は、どうせただの者ではない。

やもり 下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段
まで



たいら這うようにして上りつめた。

そして体を出来るだけ、平にしながら、頸をのぞ出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

しがい 見ると、楼の内には、噂に聞

いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあ

るが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、

知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるとい

う事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そして、その死骸は皆、

こそそれが、かつ

て、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造

あつた人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上

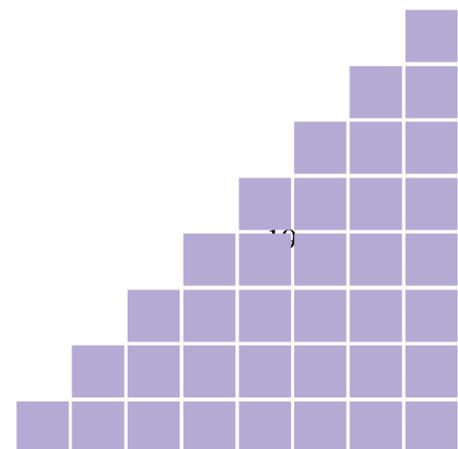
にころが

っていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を

おしうけて、低くなっている

部分の影を一層暗くしながら、永久に唾の如く黙って

いた。



げにん

ふらん

おお

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、

その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

うづくま 下人の眼は、その時、はじめて

その死骸の中に 蹲 っている人間を見た。

ひわだいろ

やしらがあたま

檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老

きざれ婆である。その老婆は、右の手

に火をともした松の木片を持って、その死骸の

一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

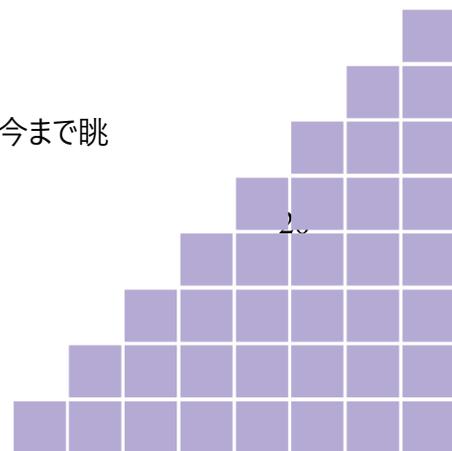
ざんじいき

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさ

とうしんえ忘れていた。旧記の記者の語を

借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じ

たのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺



しらみめていた死骸の首

に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の 虱 をとるよう

に、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消

えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづ

ごへいつ動いて来た。――い

や、この老婆に対すると云っては、語 弊 があるかも知れ

ない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。

うえじにこの時、誰

かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、饑 死 をすぬすびとるか 盗 人 になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未

練もなく、饑死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床

きぎれに挿した松の木 片 のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上



で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そう

ひじりづかして 聖 柄 の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が

驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで
いしゆみ はじ
弩 にでも 弾 かれたように、飛び上

った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を

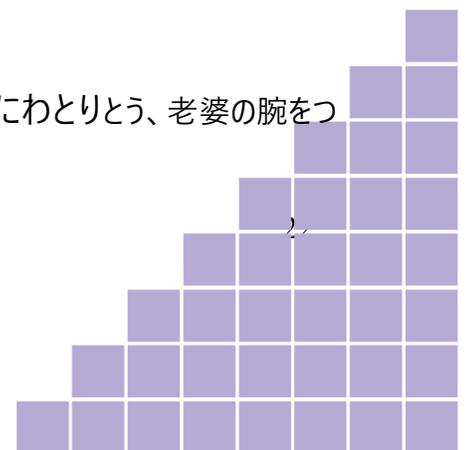
ふさ ののし

塞 いで、こゝろ 罵 った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かす

まいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、

はじめからわかっている。下人はとう

にわとりとう、老婆の腕をつ
かんで、無理にそこへじ倒した。丁度、 鶏 の脚のよう



な、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

さや

はがね

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色

をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわ

めだませて、肩で息を切りながら、眼を、眼球がの外
へ出そうになるほど、見開いて、

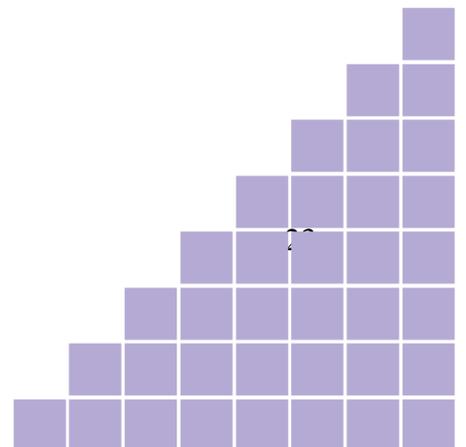
しゅうね唾のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老
婆

の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけ
わしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。

あと

後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らか

な得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云
った。



おれ けびいし

「己は検非違使の序の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅なわの者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、

今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ。」すると、老婆は

、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。の赤くなった、肉食鳥のよう

な、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでい

るように動かした。細い喉

のどぼとけ

で、尖った喉

からす

仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の

あえ啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ

伝わって来た。

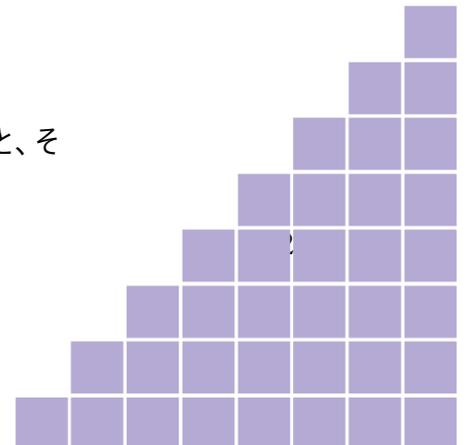
かずら

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、ま

ぶべつ

た前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、そ



けしきの気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪

ひきった長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声
で、口ごもりながら、こ

んな事を云った。

しびと

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、

ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。

しすん現在、わしが今、髪を抜いた女など

はな、蛇を四寸ばかりずつに切って干した

ほしうお

たてわき

い

えやみ

のを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかっ

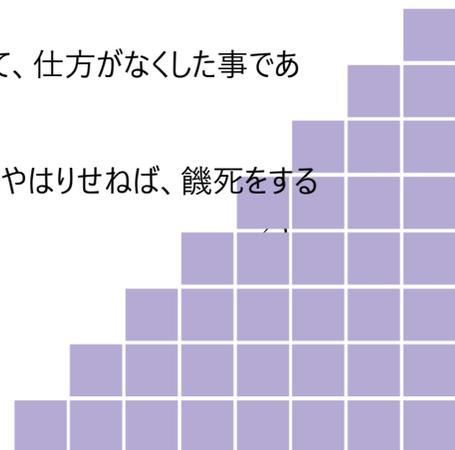
て死ななんだら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚

さいりようは、味がよいと云うて、太刀帯

どもが、欠かさず 菜 料 に買っていたそうな。

わしは、この女のした事が悪いとは思っていない。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事であ

る。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をする



じゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わ

しのする事も大目に見てくれるである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

さや

つか

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷

然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな

にきび面 砲を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、饑死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、饑死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

おわ

あざけ

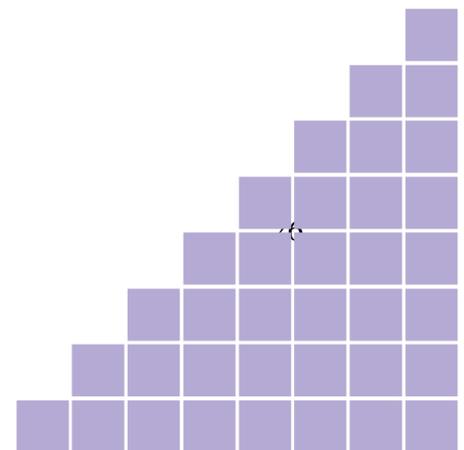
老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足

にきび

えりがみ

前へ出ると、不意に右の手を面 砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、

噛みつくようにこう云った。



おれ ひはぎ

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする

体なのだ。」下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとす

る老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかり

ひわだいろである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に

急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間も

なくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたより

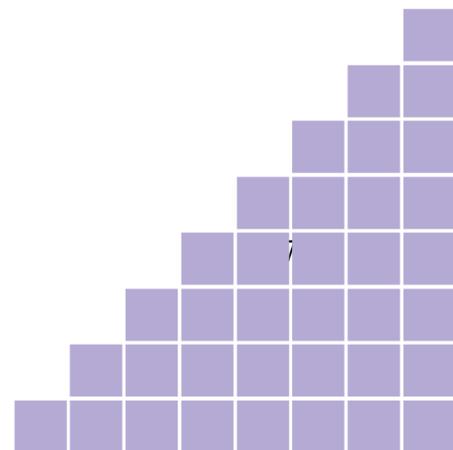
に、梯子の口まで、這って行った。そう

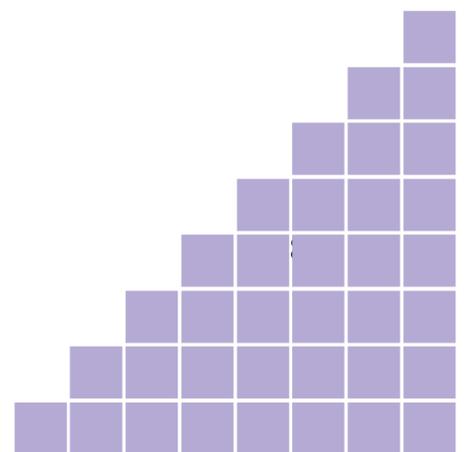
しらがさかさまして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、

こくとうとうただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

ゆくえ

下人の行方は、誰も知らない。





テキスト 3：小泉八雲「心中」（原文英語、上田和夫訳）

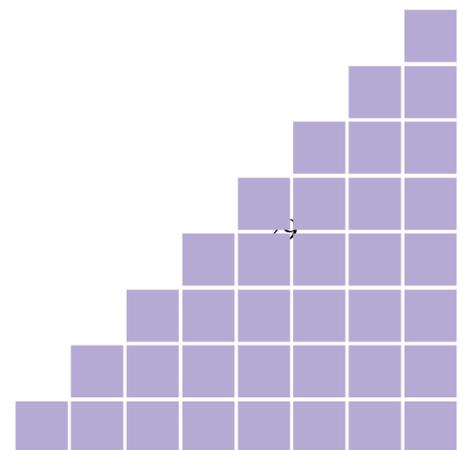
*作者について：

小泉八雲 (1850-1904)の本名はラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn)である。当時はイギリス領であったレフカダ島（1864年にギリシャに編入）で生まれる。アイルランド人の父と、ギリシャ人の母を持つ。幼少期は、父の出身地であるダブリンで過ごした。しかし、両親の離婚に伴い、4歳のときに父方の大叔母に引き取られ、厳格はカトリック文化の中で育てられた。1959年に渡米し、ジャーナリストとして活躍する。1890年に日本に行き、英語を教える。日本文化を紹介する著書を多く執筆し、また日本の地方に残る民話を妻セツからの後述でまとめた。また、『雨月物語』『今昔物語』を題材にした短編も多く書き、これらは再話文学と呼ばれている。

* 読む前に

1. 人はどんな理由で心中をするのでしょうか。
2. あなたは、「売春」ということばを聞いてどんなことを思い浮かべますか。
3. 作者について何かテーマを一つ決めて調べ、グループで発表し合いましょう
(例：作者の生い立ちはどのように作品に反映されていますか。日本への関心はどのようにして始まりましたか)。

* 読みましょう (第2章より抜粋)

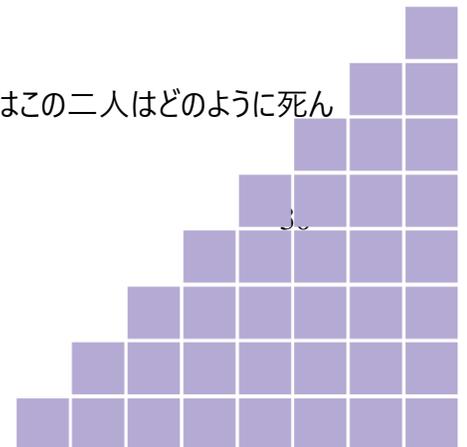


つい昨日のこと、一つの心中事件がこの静かな町を驚かした。灘町のある医者の下男が、夜の明けた後しばらくして、主人の息子のへやにはいってみると、若者が娘を抱いて死んでいるのを発見した。息子はすでに廃嫡されていた。娘は女郎であった。昨夜、彼らは葬られたのだが、一緒ではなかった。父親がそうした事件のあったことを悲しむと同時に、立腹したからである。

娘の名は、かねといった。ひときわ美しく、また非常にやさしかった。そして、だれの話からも、彼女の主人はそうした日陰商売にはめずらしいほど親切に彼女を取り扱っていたらしい。彼女は、母親と幼い妹のために身を売った。父親が死んで、いっさいを失った。17のときである。女郎部屋に来て、一年のたたぬうちに、その青年と出会った。たちまち二人は激しい恋におちいった。二人の身にとって、これ以上恐るべきことはありえなかったに相違ない。とうてい夫婦になれる見込みはなかったからである。青年はまだ息子として特権はもっていたが、もっと生真面目な弟のために、すでに廃嫡されていた。不幸な二人は、逢瀬を重ねるために、持ち金をすべて使い果たした。女は代金として自分の衣装をさえ売り払った。とうとう最後に、二人は夜中おそく、ひそかに医師の家で愛、毒を飲み、永遠の眠りについたのであった。

* テキストに関する質問

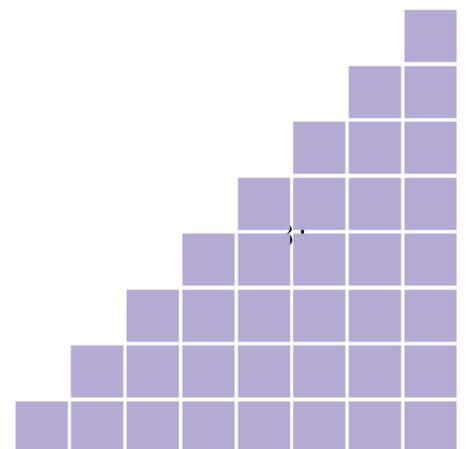
1. 日本では「心中」の具体的な方法がいくつかありますが、テキストではこの二人はどのように死んだのですか。



2. 「心中」をする人は、来世に何を期待しているのですか。
3. 「心中」は、仏教ではどんな考え方をしていますか。
4. 「心中」を遂げた二人が「一緒に墓」に入ることができた場合と、そうでない場合とでは、どう違うと思いますか。
5. 女性の場合、社会的な階級と「心中」とは、どんな関係があると言っていますか。 6. 「かね」という女性の話しが例として出ていますが、「かね」はどんな境遇の女性でしたか。
7. 「かね」の「心中」の相手はどういう境遇の人ですか。
8. 「かね」とその相手はなぜ「心中」を選んだのですか。
9. 新聞記者が「かね」の手紙をうまく翻訳できないのはなぜですか。
10. 「女ことば」と「男ことば」は何が違うと言っていますか。

* ディスカッション／ペーパー トピック

1. あなたは「かね」の選択をどう思いますか。あなたが「かね」（もしくはその相手）ならどうしますか。時代背景や境遇を考えながら意見を述べなさい。
2. 著者は「かね」の事件をどのようにみていますか。それはテキストのどんなところでわかりますか。
3. あなたの国の文化では、「心中」はどのように考えられていますか。それはなぜですか。



テキスト 4

島田洋七：『佐賀のがばいばあちゃん』第一章・二章

* 作者について：

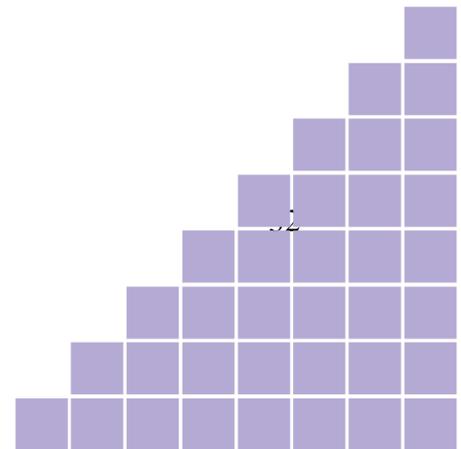
島田洋七（1950- ）は 1950 年に広島市で生まれる。日本の漫才師、タレント。本名は徳永昭彦。2015 年現在、漫才トリオの初代 B&B の一人として活躍した。

生い立ち：父親は 2 才の時に原爆症でなくなる。6 才から 8 年間祖母のいる佐賀に預けられ、祖母の影響を受ける。このころの生活を『佐賀のがばいばあちゃん』として

2002 年に出版、反響を呼ぶ。高校時代は野球に没頭。1970 年、東京に出て落語に接し、芸人になることを決意する。1972 年、初代の B&B を結成し、漫才師としてデビューを果たす。その後は都内にお好み焼きレストランを何軒も持ったり、参議院議員に立候補したり、独立して個人の芸能事務所を設立したり（後に解散）、とさまざまな活動を経て、現在も活躍中である。『佐賀のがばいばあちゃん』は映画、演劇にもなり、多くの読者を掴んでいる。

* 読む前に

1. 都会と田舎では、子どもの生活や家族関係はどのように違いますか。
2. 子どもにとって、祖父母はどんな役割を果たしていますか。



3. 作者について、どんな人物か、どこがユニークなのか調べましょう。

* 読みましょう（徳間文庫より一部のみ抜粋）

第一章： 昭和20年8月6日。広島に世界初の爆弾が投下された。あるいは、事の起こりはこの一発の原爆だったのかも知れない。なぜなら、原爆さえ落とされなければ、俺のとうちゃんが若くして死ぬことはなかったのだから。

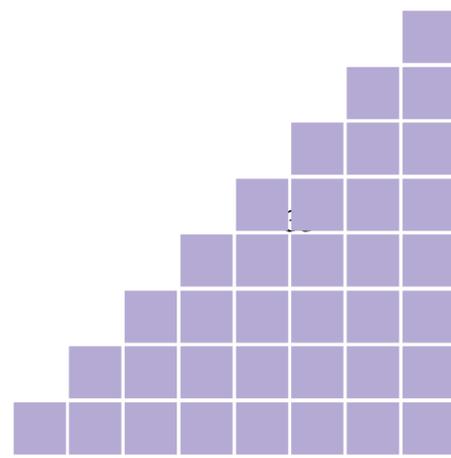
俺のとうちゃんとかあちゃんは、結婚して広島に住んでいたが、戦争が激しくなったころ、かあちゃんの実家である佐賀に疎開した。だから、本当に幸いなことに原爆に合わないで済んだ。

けれども、すごい新型爆弾が広島に落とされたという話は、当然、佐賀にも伝わってくる。それでとうちゃんは家が心配で、一週間後、ひとり広島へ様子を見に帰ったのだ。「みんなどこへ行ったんや？」破壊された広島町を見て、とうちゃんはこんなまぬけは言葉を吐いてしまったという。そのくらい、とうちゃんが見た広島には、何もなかったのだろう。みんな壊されてしまい、みんな死んでしまったのだった。そして、とうちゃんもこの広島行きが原因で命を落とすことになる。(以下本文略)。

* テキストに関する質問

(第一章)

1. 主人公が父親について知っていることを述べなさい。



2. 主人公の母親はどうやって家族の生活を支えていましたか。

3. 母親と暮らしていた当時、主人公は幸せでしたか。テキストの中から当時の気持ちがよく表れている箇所をさがしなさい。

4. 母親はどんな方法を使って主人公を佐賀に行かせましたか。5. 主人公の母親は、どんな気持ちで主人公を佐賀に行かせたのでしょうか。そして主人公はどんな気持ちで佐賀にむかったのでしょうか。両者の気持ちがよく表れている箇所はどこですか。

第二章（本文略）

6. 祖母のいる佐賀の風景や家をどのように描写していますか。

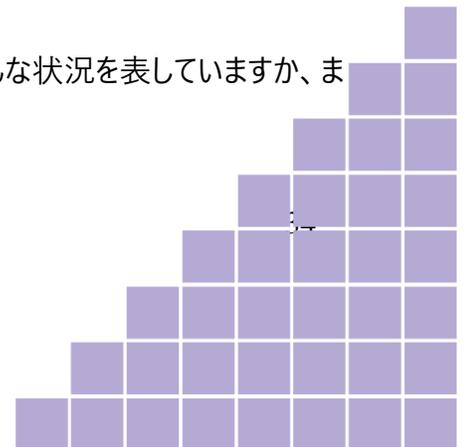
7. 主人公がまず最初に与えられた仕事はなんでしたか。2つ述べなさい。

8. 祖母はどんな性格ですか。テキストの中から例をあげて述べなさい。

9. 彼女は節約のためにどんな工夫をしていますか。

一、二章を読んだ後で：

II. 次の引用文は、だれのことばで、どんな場面で言われましたか。それはどんな状況を表していますか、またはその人のどんな気持ちを表わしていますか。



(第一章)

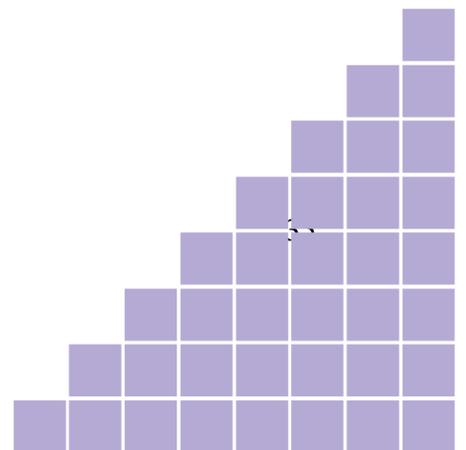
1. みんなどこへ行ったんや？
2. 泣いたらだめよ。
3. かあちゃん、背中押したりするから。
4. 大丈夫、おばちゃん。僕、次の駅で降りるから。心配しなくてもいいよ。

(第二章)

5. ここ、何？
6. かあちゃん、見てみて！
7. ただ歩いたらもったいなかとよ。
8. 2, 3日待ちなさい。もう片方も流れてくるよ。

*ディスカッション・ペーパー トピック

1. 主人公が祖母と母親から得たものは何でしょうか。また、この二人は主人公の人格形成にどんな影響を与えていますか。



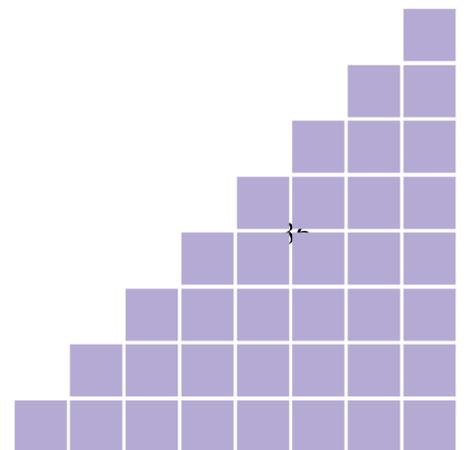
2. このストーリーの時代と今の子どもたちの生活はどう違いますか。何がそのような違いをもたらしたと思いますか。今の子どもたちの方が幸せだと思いますか。
3. あなたは今の子どもたちに何を期待しますか。そのためには、親としてどんな責任がありますか。
4. この二つの章では、原爆の恐ろしさ、非人間性についても書かれています。それがわかる箇所はテキストのどこですか。
5. 長崎、広島の前爆投下について、なにかテーマを決めて調べましょう。また、わかったことをグループで話し合いなさい。

テキスト 5:

村上春樹：『風のうたを聴け』第一章

* 読む前に

1. 友情と恋愛はどう違いますか。
2. 「青春」ということばから、どんなことを思い浮かべますか。



3. 村上春樹について、テーマを決めて調べましょう(例：彼の作品の特徴はなんですか。生い立ちを読み、彼の作品に影響を及ぼしているものが何か考えましょう)

*テキストに関する質問 (第一章を読んで)：

1. 「デレク・ハートフィールド」はどんな作家ですか。分かったことを箇条書きにしてください。

2. 「鼠」はどんな環境で育ちましたか。

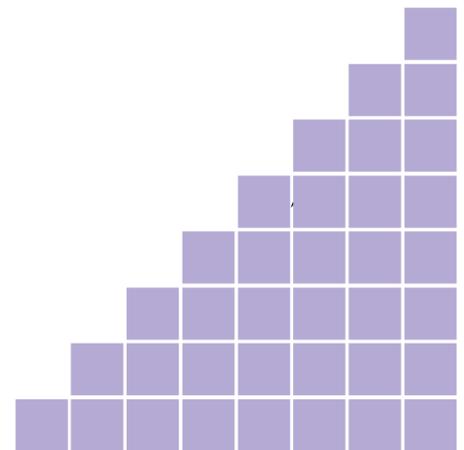
3. 「僕」と「鼠」はどのようにして友達になりましたか。

4. 「僕」は少年の頃、どんな子どもでしたか。今はどうですか。

5. 「僕」が「指のない女の子」とどのようにして出会いましたか。

6. 「僕」の、過去の3人のガールフレンドとの出会いと分かれのいきさつについて、それぞれ簡単に述べなさい。7. 次の4人の登場人物のその後をそれぞれ簡単に述べなさい。

「僕」、「鼠」、「指のない女の子」、「ジエイズバーの主人」



8. この時代をよくあらわしている箇所をテキストから3つ選びなさい。

* ディスカッション・ペーパーピック

1. 「デレク・ハートフィールド」は、このストーリーの展開にどんな役割を果たしていますか。

2. 「僕」と「指のない女の子」はどんな関係ですか。

3. 時々挿入されるラジオ番組の放送は、このストーリーの中でどんな役割を果たしていますか。

4. 全編に流れている「僕」の感情や感じ方には、あなたとどんな共通点、もしくは相違点がありますか。
。

5. このストーリーには、登場人物たちの話すジョークや比喩がたくさんちりばめられています。印象に残ったものを2つあげなさい。それはどんな場面でどのように使われましたか。

6. このストーリーには、文化の差異を越えたどんなメッセージがあると思いますか。

